

ル・コルビュジェの東方への旅における「屋根」への感性

千代章一郎*, 塚野路哉**

*広島大学大学院工学研究院准教授・博士（工学），**広島大学大学院工学研究科博士課程後期

Le Corbusier's Kansei(Sensibility) of 'Roof' in Voyage d'Orient

Shoichiro SENDAI *, Michiya TSUKANO **

*Assoc.Prof., Graduate School, Hiroshima Univ., Dr. Eng. 1-4-1 Kagamiyama, Higashihiroshima-shi, Hiroshima, 739-8527, Japan

**Graduate School, Hiroshima Univ. 1-4-1 Kagamiyama, Higashihiroshima-shi, Hiroshima, 739-8527, Japan

Abstract: The purpose of this paper is to consider the Kansei (sensibility) of the architect concerning 'roof' in the journey by the text analysis from the viewpoint of Kansei-philosophy. This paper deals with Le Corbusier's journey to the east (1911). At first, we analyze Le Corbusier's descriptions extracted from *Voyage d'Orient Carnets* and *Le Voyage d'Orient*. We find that Le Corbusier describes the non-modern and physical themes for 'roof' ('material', 'form' and 'color'), and the metaphysical theme concerning 'toplight' and 'landscape'. We can say that the fundamental Kansei of the architect, in other words, the operation of hand on journey, takes part in the process that the non verbal tacit knowledge in the journey are written from his records, or the process that the non-modern themes obtained through the experience of journey are converted into the modern architectural theories.

Keywords: Kansei of the Architect, Le Corbusier, Voyage d'Orient, Roof

1. はじめに

1. 1. 目的

本稿では、感性哲学的視点から[1]建築的感性を明らかにするため、近代建築家の一人であるル・コルビュジェ (Le Corbusier 1887-1965) の東方への旅 (Voyage d'Orient 1911) に着目し、身体と五感を働かせた旅の中での建築家の「屋根」に対する感性について考察することを目的としている。

ル・コルビュジェが近代建築家としての活動以前に行った約6ヶ月間のこの旅は、後に自身の著書『建築をめざして (Vers une architecture) 』[2]や『ル・モデュール (Le Modulor) 』の研究[3]の中でも度々取り上げられ、この旅が建築家としての建築設計活動に大きな影響を与えるような発想、創造の源泉となっていることがしばしば指摘されている^[4]。

筆者らはすでに、ル・コルビュジェの東方への旅における「壁」についての感性を考察している[5]。ル・コルビュジェは、旅の現場で即時記録的に残した『手帖』*Voyage d'Orient Carnets* [6] (本稿では『手帖』と表記) に「壁」を記述する際、即時的に言語化できるような「壁」の物質的特徴を事物的記述によって記録し、言表不可能な空間の現象的特徴に関しては素描を書く事で記録を残している。そして、旅行記である『東方への旅』*Le Voyage d'Orient* [7] (本稿では『旅』と表記) としてまとめるにあたり^[22]、非言語的、もしくは暗黙知化され、蓄積していた「壁」の想起や、身体化していた「壁」の文章化を現象的記述により試みている。

本稿では、同じ旅における「屋根」に着目する (図1)。

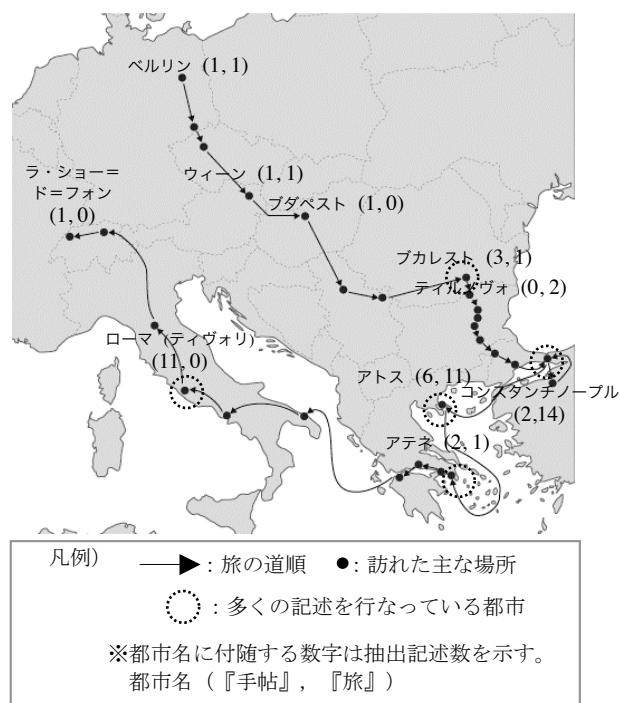


図1 東方への旅の旅程

1. 2. 研究の方法

東方への旅の分析の一次資料として、旅の現場で即時記録的に残した『手帖』、および旅行記である『旅』の記述を用いる^[3]。この一次資料から屋根を説明対象とする言説を抽出し、両者を比較検討する。なお分類方法については、一時資料とした文献から抽出される言説の内容を KJ 法的に

注4) 整理し、記述の対象となる主題を分類項目としている。

加えて、抽出した「屋根」に関する記述について、客観的に捉えた事物的記述と、ル・コルビュジエ自身の心象を付加し「屋根」を主観的に捉えた現象的記述に大別し（表1）、旅における直接的な記述である『手帖』と後の事後的な記述である『旅』の比較検討を行う。

1. 3. 研究の位置付け

ル・コルビュジエの東方への旅やイタリア等その他の旅に着目し、手帖の素描や記述、あるいは言説を分析した研究は数多くされている。代表的なものとしては、旅の体験がル・コルビュジエの後の建築設計に与えた理念的影響や、旅において見出された歴史的建築物の建築設計への参照システムの分析がある[8][9][10]。また、旅の旅程や記録の実証的研究を通して、ル・コルビュジエの自己形成に関する分析を行なっているものがある[11][12]。これらの既往研究は、ル・コルビュジエの旅を通しての自己形成と理念形成の包括的な論証であり、いわばル・コルビュジエの知性の形成に関する考察である。

これらの既往研究に対して本研究は、知性以前の建築家の身体的な旅における感性に着目している。

また、建築物の価値を定量的に分析した研究に、照沼聡氏、長沢伸也氏の両名による一連の経験価値研究[13][14]や伊藤真琴氏らの歴史的建造物復原の研究[15]がある。長沢氏らの研究はユーザーやクライアントの視点からの建築に対する評価形成が主題化されており、また伊藤氏らの研究は、クライアントの視点からの評価基準を設計決定要素として用いる手法の提案をしている。それに対し本稿はデザイナー（建築家）の視点からの建築に対する感性に特に主眼をおいている。また、建築家の感性を考慮した設計における形態創成システム評価について定量的に分析している研究として、佐々木啓介氏・堤和敏氏の研究[16]があるが、建築的感性そのものを必ずしも主題化していない。

さらに、ル・コルビュジエの屋根に関する研究[17][18]も行われているが、建築制作を通じた形態分析が主であり、旅との関連性には言及されていない。

表1 東方への旅の記述分類表（抜粋）（但し、太文字イタリック体記述は現象的記述を示す）

主題					対象	記述	
素材	形態	色彩	天井採光	景観		『手帖』（中村貴志・松政貞治訳）	『旅』（石井勉訳）
	○				ウィーン／「花の日 Blumen Tag」あるいはウィーンの春祭	流れ出るような、目を見張る筒形ヴォールト[?]、それが、視界を奪うほどの影響力をもつ[?]	
○		○		○	ブダペスト／城壁の周囲のあばら屋	薔の波は、繊細で見事な黒ねずみ色の帯となり、その屋根の非常に緻密な網目模様と黄色い壁とが織りなす、有機的で生き生きとした線は、時として、大様式と呼べるほど高貴なものに見える。	
		○		○	ルーマニア／ダニユーブ河航行（ブカレスト到着前）	しかし、2、3の砂丘が向かい合ったその胸元のオアシスには、村が宿り、褐色がかったその屋根と、春には白く塗られるファサードが、アカシアの木々の間に棲みついている	紫を帯びた屋根と新しく塗りなおされたファサードが、アカシアの樹の下に見え隠れしている。
○				○	チルノボ		壁は白く木組は黒く塗られ、屋根は樹皮で葺かれているようだ。遠くから眺めると、それは乾いた層をなしているように見える。
	○				アドリアノーブル（エディルネ）／エスキ・ジャーミ・モスク	驚くべきことには、9つの穹窿が同じ直径なのに、1の穹窿がもっとも高くなっている。一見したところ、直径がすべて等しいとはわからない。教会堂の全体が唯一の外皮をまとっている	
○		○		○	コンスタンチノーブル／ベラ		大きな屋根を連ねた木造家屋群が、神秘さをたたえた囲いのみずみずしい緑の中に、紫を帯びたその色合を際立たせている。壮大な、じつに壮大な白いモスクをとり囲むようにそれら家々は調和をなして群がっている。
	○		○		コンスタンチノーブル／スタンブール		そこには大蓋の無数の小窓が主窓のごとく光り輝き、さらにその上は形も定かでない広大な空間がひろがるばかりだ。半球はそのスケールから免れるという魅力をもっている。
	○			○	コンスタンチノーブル／スタンブール		（ハン）は厳格な四辺形の外部を形成している。その平屋根の上には多数の小さな鉛の円屋根が聖殿の軸方向にしたがって一列に並び、釣合をたもちながら、聖殿と対比をなしている。
	○				コンスタンチノーブル／スタンブール		木造の町がまわりをとり囲み、右造のその中心部には巨大な組石造のキューブの上にドームを戴いた白い聖殿が聳える。正方形や立方体、球体といった幾何学的要素がマスを規律に服させている。
	○		○		コンスタンチノーブル／バザール		低い筒形ヴォールトのここかしこに小さな窓が開けられているが、そのためにかえってほどよい光が射しこんでいる。
		○		○	イスタンブール／スタンブールで見たトルコ風の家並み	スタンブールで見たトルコ風の家並み、カシム・パシヤ[?]。荒っぽいが、魅力的な芸術。太陽が背後に沈み、山全体がそっくり四角い屋根瓦をまとい、ただ黒褐色の乾いたうろこ模様となる時、荒っぽくて粗野だ。幾千もの四角い窓がこの屋根瓦のような山腹を穿ち、白い空がこの窓に映し出されている。まるで四角い白の斑点模様をほどこした黒い甲羅のようだ。しかし、太陽が木々の子前で輝く時には、果樹園のように魅力的で、周囲一帯にやさしく光る緑に映えて、家々の屋根瓦は紫色となる。	
○	○	○			アトス／カラカロウ		灰色の石を敷きつめた中庭にある聖堂は、基部から鉛筆きの円屋根にいたるまで一様に牛の血のような深紅色であった。
	○				アトス／ヴァトペディ修道院、イヴィロンの食堂	壁がすべて一色で、アーチ型の窓は、穹窿をなす筒形ヴォールトや、首型の半円ヴォールトと同族だからだ。すべてが白色だ。	穹窿にリズムをつけている二重アーチが石の圧力と均衡をたもっている。
			○		ローマ／アグリッパのバンテオン	・・・・・・そして荘嚴なのは、窓ガラスもなく天空に穿たれた、あの高みから射し込む一条の光なのだ	

2. 『手帖』における「屋根」の記述

東方への旅におけるル・コルビュジェの「屋根」に関する主題を分類すると、屋根を構成する材料に着目する記述、建築の屋根全体若しくは一部の屋根形状に着目する記述、屋根の表層部の色彩を捉えた記述、屋根に空けられた開口に着目した記述、屋根によって創出される景観に着目した記述の5つに大枠として分類できた。以下、「素材」、「形態」、「色彩」、「天井採光」、「景観」に関する典型的な記述を抜粋する^{注5)}。

2. 1. 素材

「素材」に着目した記述は旅を通して民家に数多く見られ、旅の後期になるにしたがって次第に減少している。ル・コルビュジェはブカレストの村々の家屋について素描を描き、その横に「(小枝の木舞格子に泥漆喰を塗っただけの、柱と横木の小屋) 藁葺きの屋根」^{注6)}と記して屋根を構成する「素材」の分析を行っている(図2)。このようにル・コルビュジェは旅の中で多くの自然素材(*produits naturels*)の屋根を詳細に捉え、土着的な素材を空間の構成要素の一部として詳細に記録している。

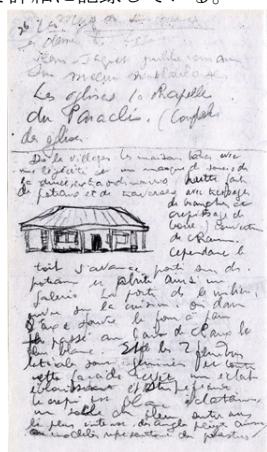


図2 ブカレストの家々の家屋^{注7)}

さらに、ル・コルビュジェはブダペストの城壁周囲のあばら屋について「薔の波は、繊細で見事な黒ねずみ色の帯となり、その屋根の非常に緻密な網目模様と黄色い壁とが織りなす、有機的で生き生きとした線は、時として、大様式と呼べるほど高貴なものに見える」^{注8)}と記しているように、多くの記述で「素材」と「色彩」を同時に扱い、『手帖』に空間体験の印象をより精緻に記録しようとしていたと推測される。

2. 2. 形態

旅を通して教会やモスクのドーム屋根に関する記述が多く見られる。ル・コルビュジェはウィーンの春祭に関する記述において次のように記述し、ドームの持つ影響力と空間に及ぼす効果を示している。「柱身の黒い柱廊と、そこから流れ出るような、目を見張る筒形ヴォールト、それが、視界を奪うほどの影響力をもつ」^{注9)}。また、アドリアノーブルのエスキ・ジャーミ・モスクに関する記述では詳細な平面図とともに「驚くべきことには、9つの穹窿が同じ直径なのに、1の穹窿がもっとも高くなっている。一見した

ところ、直径がすべて等しいとはわからない。教会堂の全体が唯一の外皮をまとっている//僕は、素足で寸法を測りとる」^{注10)}と自らの印象を記述し(図3)、ドーム屋根が実際の寸法以上に空間に広がりをもたせる効果について着目している。

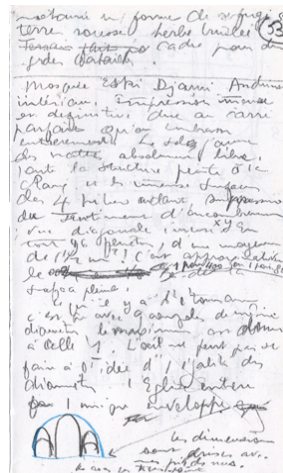


図3 アドリアノーブルのエスキ・ジャーミ・モスク^{注11)}

2. 3. 色彩

ル・コルビュジェは旅の早期から「色彩」に注目し、ルーマニアの村について次のように屋根の色彩を指摘している。「2、3の砂丘が向かい合ったその胸元のオアシスには、村が宿り、褐色がかかったその屋根と、春には白く塗られるファサードが、アカシアの木々の間に棲みついている」^{注12)}また、イスタンブールのトルコ風の家並みに関して「太陽が木々の子前で輝く時には、果樹園のように魅力的で、周囲一帯にやさしく光る緑に映えて、家々の屋根瓦は紫色となる」^{注13)}と記して、ル・コルビュジェは「屋根」そのものの色彩を精細に描写する一方、太陽の時間推移に伴い、光でつねに変化を遂げる、現象的な色彩にも関心を寄せている。

2. 4. 天井採光

旅の初期には「天井採光」に関する記述はないが、コンスタンチノーブル以降の寺院に関していくつかの記述が見られるようになる。また、「穹窿には穴があけられ、その部分は、鉄材に替えてある」^{注14)}と述べているように、ル・コルビュジェは「天井採光」に関するほぼ全ての記述をドーム状の円屋根に関して述べている。

さらに、ローマのパンテオンにて「・・・そして荘厳なのは、窓ガラスもなく天空に穿たれた、あの高みから射し込む一条の光なのだ」^{注15)}と述べているように、ドーム屋根から射し込む光の効果による現象的な記述を行っている^{注16)}。さらに、ティヴォリのカノプスについて「潜勢的には、これはこの形態。この明かり取りは美しい。＜中略＞この光の効果は、見る価値がある」^{注17)}と述べられており、ル・コルビュジェは光の効果と共に構成要素と天井採光の仕組みを素描と即時的な記述によって同時に描写することで、精緻に超越的な光を生み出す建築要素を記録している(図4)。

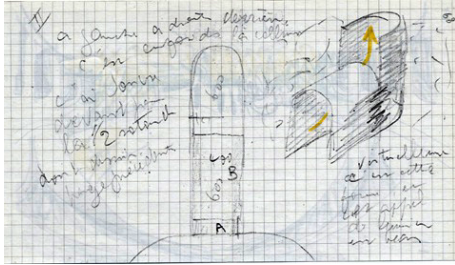


図4 ティボリのカノプス^{注18)}

2. 5. 景観

ル・コルビュジェは旅の初期から「景観」に関する記述を民家や祭り等といった街全体を捉えた記述に多く残しているが、ローマ以降の旅の終盤では見られなくなる。

イスタンブールでの記述ではスタンブールで見たトルコ風の家並みについてル・コルビュジェは以下のように記述している。「屹然と聳えるミナレット。その壮麗な統一感と、高貴な金色の穹窿」^{注19)}。このように「景観」に関する記述には「秩序 (ordonné)」や「統一 (unite)」といった言葉が多く用いられ、集落や街並みの重なり合う屋根が周辺環境や自然との調和となり得ている情景を示している(図5)。

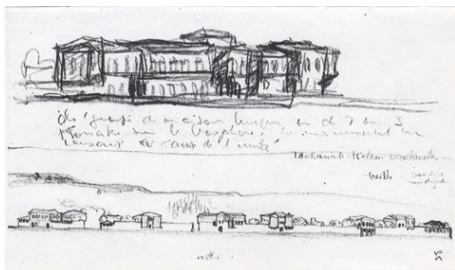


図5 ボスフォラス海峡に面したトルコ風の家屋群^{注20)}

3. 『旅』における「屋根」の記述

『手帖』における分類に依拠し、「素材」、「形態」、「色彩」、「天井採光」、「景観」の5つの主題に関する典型的な記述を抜粋する^{注21)}。

3. 1. 素材

『旅』においてル・コルビュジェは、「壁は白く木組は黒く塗られ、屋根は樹皮で葺かれているようだ。遠くから眺めると、それは乾いた層をなしているように見える」^{注22)}と記述している様に、「屋根」を構成する多くの自然素材 (produits naturels) の分析を行い、土着的な「屋根」を詳細に捉えた記述を多く残している。

またスタンブール以降において、「灰色の石を敷きつめた中庭にある聖堂は、基部から鉛葺きの円屋根にいたるまで一様に牛の血のような深紅色であった」^{注23)}と記し、鉛などの人工素材 (produits artificiels) にも着目している。

さらに、ル・コルビュジェはブルガリア北部の小都市チルノボに関して「穴だらけの瓦で葺かれた崩れかけの大きな屋根と屹立する尖塔をもったモスクの球体と」^{注24)}と記している様に、時間や状況によって変容する視覚的な印象よりも、より素材そのものの直接的な質感やその瞬間の状態等、事物的な記述を詳細に示し、「素材」を空間の建築構成要素の一部として捉えた記述をしている。

3. 2. 形態

ル・コルビュジェは、アトスでの記述にて「四メートルほどのじつに小さな円屋根が、偉大で、充ち足りて、力強く、高く、へこんだぎぼしが載っているような姿を見せて現われる」^{注25)}と述べ、ドーム状の円屋根に関する多くの記述を残している。また、コンスタンチノーブルのドーム屋根に関して、「形も定かでない広大な空間がひろがるばかりだ。半球はそのスケールから免れるという魅力をもっている」^{注26)}と特徴的な記述をし、ドーム形態の内部空間において、実際の寸法以上に空間に広がりをもたせる効果を見いだしている。

さらに、スタンブールのモスクに関して「厳格な四辺形の外郭を形成している。その平屋根の上には多数の小さな鉛の円屋根が聖殿の軸方向にしたがって一列に並び、釣合をたもちながら、聖殿と対比をなしている」^{注27)}や「木造の町がまわりをとり囲み、石造のその中心部には巨大な組石造のキューブの上にドームを戴いた白い聖殿が聳える。正方形や立方体、球体といった幾何学的要素がマスを規律に服させている」^{注28)}と記述しており、外部から見たドーム屋根の「形態」を幾何学的に捉えている。

3. 3. 色彩

旅の早期から、ル・コルビュジェは「色彩」に注目しており、アトスのダフニについて次のように述べている。「そこから離れると驛馬の向きを変えて止め、その上方に姿を見せている僧院を眺めて、私はスタンブールの追憶とともに鉛色の円屋根の甘美な存在を確認した」^{注29)}。また、アトスのカラカロウにて「灰色の石を敷きつめた中庭にある聖堂は、基部から鉛葺きの円屋根にいたるまで一様に牛の血のような深紅色であった」^{注30)}と記述しているように、ル・コルビュジェは屋根素材の色や彩色された屋根そのものの色に着目し、事物的な記述によって詳細に記録を残している。

3. 4. 天井採光

旅の初期には「天井採光」に関する記述はなく、後期のコンスタンチノーブルとアトスの宗教建築のみに着目した記述が見られる。アトスの僧院に関しては、ル・コルビュジェは次のように記述している。「低い筒形ヴォールトのここかしこに小さな窓が開けられているが、そのためにかえってほどよい光が射しこんでいる」^{注31)}。その他にも、「天井採光」に関するほぼ全ての記述をドーム屋根に関して述べており、開口部の形態や光の方向等、細部にまで記述を行っている。また、「冠状の無数の窓から射しこむ水平な光、穹窿、荘厳な深奥部。二つのもの、内陣と巨大なフォーラム。そして度外れたひろがりを持つ半球は、奇蹟を、人類の傑作を声高に主張している」^{注32)}と述べているように、多くの宗教施設において「天井採光」が生み出す現象的な光の効果を模索している^{注33)}。

3. 5. 景観

ル・コルビュジェは旅を通して「景観」に関する記述を多く残している。旅の初期には集落全体を俯瞰的に捉えた

記述が多く見られ、ペラを訪れた際に「大きな屋根を連ねた木造家屋群が、神秘さをたたえた囲いのみずみずしい緑の中に、紫を帯びたその色合を際だたせている。壮大な、じつに壮大な白いモスクをとり囲むようにそれら家々は調和をなして群がっている」^{注34)}と記されているように、風土的な調和に着目している。

また、イスタンブール以降には特定の屋根を捉えたものが増加し、アトスの教会にて「海からの微風、景観、山の存在がつねにつきまとう広々とした戸外から、教会の玄関を通過して神殿の入口を横切る時、四メートルほどのじつに小さな円屋根が、偉大で、充ち足りて、力強く、高く、へこんだぎばし載っているような姿を見せて現われる」^{注35)}と述べているように、ミナレットや神殿等の宗教的な統一性を示している。

4. 結果

ル・コルビュジエの「屋根」を捉える主題として、事物的な主題である「素材」、「形態」、「色彩」と、現象的な主題である「天井採光」や「景観」という、合わせて5種類抽出できるが、『手帖』に示された5つの主題の記述の対象は、いずれも近代建築語彙ではなかった。

「素材」には近代建築における主要素材であるコンクリートや鉄などの人工素材は含まれていなく、「形態」に関しても穹窿屋根が主とされ、近代化で着目される陸屋根の記述は見られない。また「色彩」に関しても、近代における人工塗料によるものではなく、多くは素材そのものの色に着目している。さらに、「天井採光」の効果についても、近代建築における機能的な採光ではなく、形而上の意味をおび、「景観」もその土地固有の風土と屋根形態の関わりに関する記述であり、近代建築における普遍的思考とは異なる。

そして、ル・コルビュジエはそれらの対象を『手帖』に記述する際、その場の印象評価として現象的な記述を多く行っている。自然環境下の流転的な視覚効果や、均質でない土着的な質感によってもたらされる建築の非定型な印象を、ル・コルビュジエ自身の心象を付加することで現象的記述によって示し、素描を添えている。

一方、『旅』では同じ主題に言及していることは変わらないが、事物的な記述が多く、ル・コルビュジエはより細部にまで精緻に記述することで客観的な旅の分析を行っている。そしてそのような主題に関する記述は、「人工素材の使用」や「幾何学形態に関する記述」、「単色塗料による均質な着色」等、近代建築語彙と結びつく解釈を含んでいる。

5. 考察

このような記述の変容の典型を「天井採光」に見ることができる。東方への旅における「壁」の記述では、ル・コルビュジエは機能的な光の意味に深く関心を抱いていたが、「屋根」では言表し得ない光の効果をモスクや僧院等の宗

教建築のドーム内部に見いだし、精緻な記録を『手帖』に残している。しかし、後の『旅』では「屋根」についての言表不可能な光は客観的に書き得ず、その文章化はもしくは断念していたのではないかと考えられる。

このように、東方への旅を通した「屋根」の記述の変容は、「壁」における手帖とその文書化の問題とは対照的であった^{注36)}。

図版出典

表 1: 筆者作成

図 1: 筆者作成

図 2: Le Corbusier (Ch.-E.Jeanneret): *Voyage d'Orient Carnets*, Electa architecture, Fondation L.C., vol.2, p.26, 1987

図 3: *Ibid.*, vol.2, p.53

図 4: *Ibid.*, vol.5, p.68

図 5: *Ibid.*, vol.3, p.35

参考文献

- [1] 桑子敏雄: 感性の哲学, 日本放送出版会, 2001
- [2] Le Corbusier: *Vers une Architecture*, 1924 (Le Corbusier, 吉阪隆正訳: 建築をめざして, 鹿島出版会, 1967)
- [3] Le Corbusier: *Le Modulor*, 1948, (Le Corbusier, 吉阪隆正訳: モデュロール, 鹿島出版会, 1976)
- [4] Stanislaus von Moos: *Le Corbusier-Elemente einer Synthese*, Switzerland, 1968 (Stanislaus von Moos, 住野天平訳: ル・コルビュジエの生涯 建築とその神話, 彰国社, 1981)
- [5] 千代章一郎, 萩野亮: ル・コルビュジエの東方への旅における「壁」への感性, 第 11 回日本感性工学会大会予稿集 2009, 1B1-2_J11-090519-7.pdf
- [6] Le Corbusier (Ch.-E.Jeanneret): *Voyage d'Orient Carnets*, Electa architecture, Fondation L.C., 1987, (Le Corbusier (Ch.-E.Jeanneret), 中村貴志・松政貞治訳: ル・コルビュジエの手帖 東方への旅, 同朋舎出版, 1989)
- [7] Le Corbusier: *Le voyage d'Orient*, Les Editions Forces Vives, Paris, 1966, (Le Corbusier, 石井勉訳: 東方への旅, 鹿島出版会, 1979)
- [8] Stanislaus von Moos: *Le Corbusier-Elemente einer Synthese*, Switzerland, 1968 (Stanislaus von Moos, 住野天平訳: ル・コルビュジエの生涯 建築とその神話, 彰国社, 1981)
- [9] William J. R. Curtis, 中村研一訳: ル・コルビュジエ-理念と形態, 鹿島出版会, 1992
- [10] 松政貞治: 『ル・コルビュジエの手帖-東方への旅』を読みとく, ル・コルビュジエ 建築・家具・人間・旅の全記録, エクスナレッジ, pp.128-139, 2002
- [11] Le Corbusier: *Voyager avec Le Corbusier Croquis de voyages et etudes*, Philippe Duboy ed., La Quinzaine Littéraire, 2009
- [12] Gresleri Giuliano: *Le Corbusier, Viaggio in Oriente*, Venezia, 1984 および 1985
- [13] 照沼聡, 長沢伸也: 「代官山ヒルサイドテラス」に見る建築物の経験価値創造, 第 9 回日本感性工学会大会予稿集 2007, F12.pdf, 2007
- [14] 照沼聡, 長沢伸也: 「光の教会」に見る建築物の経験価値創造, 第 9 回日本感性工学会大会予稿集 2007, F13.pdf, 2007
- [15] 伊藤真琴, 三重野はるひ, 藤沼誉英, 大倉典子, 渡辺洋子: パーチャル環境を利用した歴史的建造物復原支援の一手法の提案, 第 11 回日本感性工学会大会予稿集 2009, 1B1-4_J11-090519-5.pdf
- [16] 佐々木啓介, 堤和敏: 設計者の感性を考慮した建築屋根の形態創生に関する研究, 日本建築学会大

会（九州）学術講演梗概集，20420.pdf, 2007. 8

- [17] Kanu Kartik: *Story of monol, Celebrating Chandigarh*, Jaspreet Takhar ed., India, Mapin Publishing Pvt, pp.402-410, 2007
- [18] Jacques Lucan ed.,: *Le Corbusier une encyclopédie*, CCI, Paris, 1987, (Jacques Lucan ed., 加藤邦男監訳: ル・コルビュジェ辞典, 中央公論美術出版, 2007)
- [19] 川喜田二郎: 発想法, 中公新書, 1967
- [20] Andre Wogensky: *Les mains de Le Corbusier*, Editions de Grenelle, Paris, 1987, (Andre Wogensky, 白井秀和訳: ル・コルビュジェの手, 中央公論美術出版, p. 87, 2006)

注

- 1) ル・コルビュジェは、1907 年にフィレンツェ・ゴシックとイタリアの原始主義の研究を目的としたイタリアへの旅を行なっている。また、1910 年と 1911 年にドイツ各地を巡礼する 2 度の旅を行ない、数ヶ月間の滞在をしている。本稿ではこれらの旅の後に行われた、最も重要とされる東方への旅のみに着目しているが、今後の研究の中ではイタリア、ドイツの建築巡礼旅行、さらには建築制作活動期のアフリカやインド、アメリカなどへの、ル・コルビュジェの建築旅行についても考察する必要がある。
- 2) この *Le Voyage d'Orient* と題される旅行記は当初 1914 年に出版される予定であったが、第 1 次世界大戦により企画中止となり、さらに旅で携えた 6 冊の『手帖』は、第二次世界大戦の前後に行方不明となる。その後原稿自体も放置されていたが、ル・コルビュジェは死の数週間前の 1965 年に再びその原稿の出版を決意する。しかし手元に『手帖』はなく、50 年以上前の草稿のみを推敲し、死後 1966 年に言わば確定稿として記述のみで出版された。ただし、1965 年にどの程度原稿に修正を加えたかは不明である。
- 3) ル・コルビュジェは旅にカメラを携帯し、数多くの写真資料を残しているが、本研究では『手帖』と『東方への旅』の分析を中心に行なっているため、本稿では研究資料として写真を使用していない。なお、『手帖』における素描を補足的に参照している。
- 4) 本稿のように、意図や目的が確定していない言説から意味内容を汲み取ることで、ル・コルビュジェの感性の分析を行うことを目的とした研究においては、意味内容の具体性を保持しつつ最終的にひとつの枠組みへと収斂させる KJ 法を用いた。(参考文献[19])
- 5) 雨風をしのぐ等の環境機能的な用途に関する記述は数少ない。
- 6) Le Corbusier (Ch.-E.Jeanerret): *Voyage d'Orient Carnets*, Fondation Le Corbusier, vol.2, p.26, 1987, (Le Corbusier (Ch.-E.Jeanerret), 中村貴志・松政貞治訳: ル・コルビュジェの手帖 東方への旅, 同朋舎出版, p.103, 1989)
- 7) 'Les églises, la chapelle/ du Paraclis. (Coupoles/ des églises//Ds les villages les maisons bâties avec/ une légèreté et un manque de soucis de/ la durée, extraordinaires (hutte faite/ de poteaux et de traverses avec tressage/ de branches et/ crepissage de/ boue.) couverture/ de chaume./ Cependant le/ toit s'avance porté sur des/ poteaux et abrite ainsi une/ galerie' (教会堂、パラクリの礼拝堂「教会堂の穹窿。村々の家屋は手軽に造られていて、長持ちさせる配慮が見られず、まったくの臨時普請だ。「小枝の木舞格子に泥漆喰を塗っただけの、柱と横木の小屋」葦葺きの屋根。しかし屋根は迫り出して柱で支えられ、回廊の庇となっている)
- 8) Ibid., vol.2, p.13, (中村貴志・松政貞治訳: p. 94)
- 9) Le Corbusier (Ch.-E.Jeanerret): op.cit., vol.2, p.6, (中村貴志・松政貞治訳: p. 89)

10) Ibid., vol.2, p.55, (中村貴志・松政貞治訳: p. 127)

- 11) 'Ce qu'il y a d'étonnant/ c'est qu'avec 9 coupôles de même/ diamètre, le maximum est donné/ à celle 1. L'œil ne peut pas se/ faire à l'idée d'l égalité des/ diamètres. L'Eglise entière/ a l unique enveloppe qui// les dimensions/ sont prises avec/ mes pieds nus./ Les arcs en tiers-point' (驚くべきことには、9つの穹窿が同じ直径なのに、1の穹窿がもっとも高くなっている。一見したところ、直径がすべて等しいとはわからない。教会堂の全体が唯一の外皮をまとっている//僕は、素足で寸法を測り取る。尖頭アーチ)
- 12) Ibid., vol.2, p.21, (中村貴志・松政貞治訳: pp. 99-100)
- 13) Ibid., vol.2, pp.77-78, (中村貴志・松政貞治訳: pp. 137-138)
- 14) Ibid., vol.3, p.17, (中村貴志・松政貞治訳: p. 165)
- 15) Ibid., vol.4, p.151, (中村貴志・松政貞治訳: p. 220)
- 16) Andre Wogensky はこの地方の建築をル・コルビュジェが「生活を包む光り輝く覆い」と捉えていたと述べ、建築のかたちによって引き起こされた光と影の遊動によって生命と宇宙が繋がるとしている。(参考文献[20])
- 17) Le Corbusier (Ch.-E.Jeanerret): op.cit., vol.5, p.63, (中村貴志・松政貞治訳: p. 243) これらのクロッキーは、カノプスの大エクセドラが集中する後陣を描いており、この部分の記述とスケッチは、ロンシャン礼拝堂 Chapelle Notre-Dame-du Haut, Ronchamp (1950-1955)における小礼拝場の構想の源泉ともいわれる。
- 18) 'Virtuellement/ c'est cette/ forme, et/ cet appel/ de lumière/ est beau-----IV// ça vaut 1 effet de lumière' (潜勢的には、これはこの形態。この明かり取りは美しい。IV// この光の効果は、見る価値がある)
- 19) Ibid., vol.2, pp.77-78,
- 20) 'La lumière vient/ parfois des coupôles qui sont perforées'(開口を穿った穹窿から、時折、光が入射する)
- 21) KJ 法的に『旅』の言説の整理も行ったが、『手帖』に付随しない主題は見られなかった。
- 22) Le Corbusier: *Le voyage d'Orient*, Les Editions Forces Vives, Paris, p.54 1966, (Le Corbusier, 石井勉訳: 東方への旅, 鹿島出版会, pp.73-74 1979)
- 23) Ibid., pp.132-133, (石井勉訳: pp.192-194)
- 24) Ibid., p.73, (石井勉訳: p.106)
- 25) Ibid., pp.142-143, (石井勉訳: pp.206-207)
- 26) Ibid., pp.76-77, (石井勉訳: pp.109-110)
- 27) Ibid., p.78, (石井勉訳: p.111)
- 28) Ibid., p.78, (石井勉訳: p.112)
- 29) Ibid., p.40, (石井勉訳: pp.54-55)
- 30) Ibid., p.133, (石井勉訳: p.194)
- 31) Ibid., p.96, (石井勉訳: p.140)
- 32) Ibid., pp.139-140, (石井勉訳: p.203)
- 33) のちに自身の著書『プレジジョン』(Précisions)の中で、穹窿屋根の内部空間に関して「ヴォリュームと光の織り成すリズムの傑作」と述べ、穹窿の形態に開口から差し込む光の効果が加わることで、内部空間に光と影の遊動による微妙な変化が得られることを示している。
- 34) Ibid., p.69, (石井勉訳: p. 100)
- 35) Ibid., p.142, (石井勉訳: p. 206)
- 36) ル・コルビュジェは『手帖』に「壁」を記述する際、即時的に言語化できるような「壁」の物質的特徴を事物的記述によって記録し、言語化できない事象に関しては素描を描くことで身体化して記憶していた。そして、『旅』としてまとめるにあたり、非言語的、もしくは暗黙知化され、蓄積していた「壁」の想起や、身体化していた「壁」の文章化を現象的記述により試みていた。(参考文献[5])